

ミニ

特集

ネギアザミウマにおける薬剤抵抗性と防除方法

ネギアザミウマの各生殖型における薬剤感受性および寄主作物について

地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 城塚可奈子

はじめに

ネギアザミウマ *Thrips tabaci* Lindeman は、ネギ、タマネギ等の野菜類、ミカン、イチジク等の果樹類、キク、カーネーション等の花き類といった多様な作物を加害する(今井ら, 1988)。また、IYSV (アイリス黄斑ウイルス; CORTÈS et al., 1998) や TSWV (トマト黄化えそウイルス; LEMMETTY and LINDQVIST, 1993) を媒介する。

国内で確認されているネギアザミウマの生殖様式は、雄が存在し雄と雌が交尾すると雄雌が生じる「産雄性単為生殖型(以下、産雄型。図-1 上)」および雄が確認されず雌のみが生じる「産雌性単為生殖型(以下、産雌型。図-1 下)」の二つである。従来、日本では産雌型のみが分布するとされていたが、1989 年以降、国内各所で産雄型が確認され(例えば、MURAI, 1990; TODA and MURAI, 2007)、産雄型は海外から侵入した可能性が指摘されている(TODA and MURAI, 2007)。

近年、ネギアザミウマでは、各種薬剤に対する感受性が低下しているとの報告があり(例えば、柴尾・田中, 2003; AIZAWA et al., 2016; 徳丸, 2022)、本種を効率的に防除するためには、各薬剤に対する感受性の現状把握が必要である。また、本種は、各生殖型で薬剤に対する感受性が異なることが報告されており(十川ら, 2013; AIZAWA et al., 2016; 徳丸, 2022)、各圃場で発生している生殖型を把握できれば、適切な薬剤の選択につながると考えられる。

ネギアザミウマの各生殖型の識別には高温時の体色の違いを利用でき、産雄型は暗色、産雌型は淡色となる(MURAI and TODA, 2002; 中野ら, 2013)。しかし、生産者にとって、体長 1 mm 前後のネギアザミウマの体色を肉眼で判別するのは困難である。このことから、どちらの生殖型の個体群にも殺虫効果の高い薬剤を選択せざるを得ない状況にある。

Insecticide-Resistance and Host Plants in Each Reproductive Form of *Thrips tabaci* Lindeman. By Kanako SHIROTSUKA

(キーワード: ネギアザミウマ, 生殖型, 感受性, 寄主作物)



図-1 ネギアザミウマの生殖型

大阪府では、ネギ、タマネギ、イチジク等で本種の被害が問題となっており、本種に対する防除対策の確立が必要となっている。当研究所ではネギアザミウマの薬剤感受性について継続して調査しており、近年、殺虫効果が低い薬剤が見られる(柴尾・田中, 2003; 2012; 城塚ら, 2019; 2020)。一方で、一部薬剤では感受性の変動が見られた(城塚ら, 2019)。これは、薬剤の使用状況や採集圃場の周辺圃場で栽培されている作物が採集年により異なることが原因と考えられるが、それらを詳細に調査した事例は少ない。

そこで本稿では、まず、大阪府内のネギアザミウマの発生および薬剤感受性の状況について説明する。次に、